

韓国薬学研修報告

梅谷 明佳里

5年 12A029

概要

2015年8月17日～20日の4日間、韓国の東国大学薬学部と国際交流が行われた。

本学からは11名の生徒が参加し、東国大学の本学および薬学部のあるイルサキャンパスの見学や韓国の病院・薬局見学、韓方市場の見学を行い、韓国の医療教育や医療、薬剤業務について学んだ。今回は研修内容の中でも病院についてまとめた。



病院について

東国大学病院は病床数650床の大病院で10以上の診療科を有する病院で、韓方医学と西洋医学の融合により患者様の病気の治療を目指す病院である。

■薬剤部

薬剤部では入院調剤と一部外来の院内処方調剤を行っている。このことから日本同様、韓国でも完ぺきな医薬分業は行っていないということが分かった。また、薬についての情報を扱うDI室や抗がん剤やTPN製剤の調整を行う注射室などが薬剤部にあり、日々薬剤師は薬剤部で業務を行っていることが分かった。

日本の病院の薬剤部と異なる点として、調剤がほとんど自動化されていて、患者の年齢や背景にかかわらず薬を一方化していることでした。また、処方箋は印刷されておらずパソコンに書かれた処方内容から調剤監査を行っていたことも大きな違いです。他にも、麻薬の管理



について、日本では麻薬室があり1つの場所に麻薬はまとめられ管理をされていますが、韓国では用途に合わせて様々な場所に金庫が設置されており、その金庫の中に麻薬が入っていることが異なります。

■韓方調剤室

韓方製剤は薬剤部の調剤室とは別の場所にある韓方調剤室で調剤されている。日本では漢方は製剤化されたものを使うのが主流ですが、韓国では実際に生薬の混合から病院で行っている。生薬の種類や、韓方製剤を作る設備など、日本の病院では見られないものばかりでした。また、韓方処方では処方医、調剤者共に医師免許、薬剤師免許の他に韓方を扱う免許が必要ということで、韓方に対する認識が日本とは大きく違い、韓方を扱ううえでより専門性の高い知識が重要であると韓国では考えられているように感じました。

感想

今回の研修に参加して、韓国と日本の医療制度や医療の考え方などの相違点を知ることができました。日本の良いところ、韓国の良いところ様々あったと思います。医療制度や医療現場の現状はすぐには変化しないし、韓国の良いところをすぐに取り入れられるものでもありません。しかし、日本以外の国の医療現場を見て、聞いて、感じたことで日本の医療制度が自分の知るところのすべてではなくなり、今後、医療人として生きていく中で意味のある体験ができたのではないかと思います。また、国は違いますが薬剤師という同じ夢を持つ東国大学の交流をできたことはかけがえのない経験となりました。

最後に、今回の貴重な経験をさせていただいた愛知学院大学、東国大学の皆様に厚く感謝いたします。



入院患者さんの薬は毎日作られ、外来患者さんの薬は10日分まで作り、渡されるとのこと。